

大学名：東海大学教養学部

ASPUnivNet の 4つの機能他	評価項目	事例記述
1. 学校のユネスコスクール加盟を支援します（加盟に関する相談も含む）	① ユネスコスクール加盟を希望する地域の学校から相談があったときにそれに応じることができた。	今年度は、学園内において付属甲府高等学校・児童教育学部への対応、加えて先方からの指名があった栃木県的那須みふじ幼稚園において、チーム内担当者が直接対応、相談に応じることができた。その他、学園内付属大阪仰星高等学校の相談に応じた。（児童教育学部については、脚注1）の通り。甲府高校は、2）の通り。）
	② ユネスコスクール・チャレンジ期間実施校に対する相談に応じることができた。	同期間を中心に、チャレンジ期間中にどのようなことが求められるか説明、サポート体制を整えることができた。
	③ 地域の加盟済のユネスコスクールに向けてESD/SDGsをリードする学校としての「質の向上」にかかわる支援を行うことができた。	2023 年度は、とりわけ関東ブロック大会の運営に玉川大学・創価大学・成蹊大学とともに関わり、ユネスコがSDGsの目標達成に向けて提示している『3つの柱』の重要性確認と、教育の質向上についてのディスカッション・発表の機会をつくることができた。（脚注3）参照。）
2. 大学の持つ知的財産をユネスコスクールの活動に提供します	① 大学の資源を活用して、地域のユネスコスクールに向けた支援（資料提供やコーディネート、出前授業やワークショップなど）を行うことができた。	かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）との連携により、上記の関東ブロック大会を協働で実施、地域のユネスコスクールに向けた支援を行った。 また、ユネスコスクール関東ブロック大会関連企画 「ユネスコの包括的性教育とは」を開催した。（脚注4）
	② 研修会やワークショップを地域のユネスコスクールと協働して開催することができた。	上述のように、かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）との連携により、上記の関東ブロック大会を協働で実施、地域のユネスコスクールに向けた支援を行った。
	③ 大学の資源を活用して、地域のユネスコスクールと協働で教材やモデルプロジェクトを開発することができた。	大学の資源を活用して、地域のユネスコスクールと協働で教材やモデルプロジェクトを開発することができた。 横浜シュタイナー学園および京田辺シュタイナー学校（どちらもユネスコスクール）に協力して、全国のシュタイナー学校がオンラインで2ヶ月に1回開催している勉強会に毎回参加して、ユネスコの提案する「包括的セクシュアリティ教育」について説明し、幼児教育から高校までの一貫した性教育のカリキュラム作りのプロセスに協力した。
3. 地域の教育機関とユネスコスクールとの連携を促進します	① 地域のステークホルダーにユネスコスクールの存在や意義について広く知らせることができた。	かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）との連携により、関東ブロック大会を協働で実施、顔の見える地域のユネスコスクールに向けたネットワーク構築することができた。

	② ユネスコスクールと地域の多様なステークホルダーとを結びつけることができた。	上述のように、かながわユネスコスクールネットワーク（KAN）との連携により、関東ブロック大会を協働で実施、顔の見える地域のユネスコスクールに向けた関係性支援を行った。
	③ ユネスコスクールに関連した地域教育委員会との連携や地域における大学間の連携を促進することができた。	横浜市 ESD 推進コンソーシアム（横浜市教育委員会）関係者と関東ブロック大会にて連携することができた。
4. 国内外のユネスコスクールとのネットワークづくりを支援します	① 地域をこえた国内外の多様なステークホルダーにユネスコスクールの存在や意義について知らせることができた	関東ブロック大会の開催において、支援地域である神奈川県内外の首都圏学校関係者にユネスコスクールの意義、3つの柱の重要性等を再考するきっかけづくりができた。
	② 地域をこえた国内外のユネスコスクールと協働で活動することができた。	関東ブロック大会の開催により、県外のユネスコスクールと協働で研修の場をつくることができた。
	③ ユネスコスクールがグローバルな活動することについてそれを支援することができた。（例：ユネスコスクールの国境を越えた交流、海外とのオンライン交流、海外のプロジェクトへの参加など）	ユネスコスクールがグローバルな活動することについてそれを支援することができた。（例：ユネスコスクールの国境を越えた交流、海外とのオンライン交流、海外のプロジェクトへの参加など） 2021年にユネスコの ESD 大賞を受賞したペルーのシュタイナー学校（Kusi Kawsay Andean School）の教員たちが横浜国大の招聘で 2024 年 2 月に来日した際に、横浜国大教育学部付属鎌倉小学校への訪問に同行し、さらに横浜シュタイナー学園に案内して子どもたちとの交流を橋渡しした。
5. 大学内の活動	① 大学内でユネスコスクールの存在や意義について広く知らせることができた。	関東ブロック大会の開催に向けて広報活動、実施報告の HP 記事掲載を通して、学園内でのユネスコスクールの存在や意義を広く知らせることができた。（脚注 3）
	② 学部大学院の教育課程でユネスコスクールにかかわる教育を行うことができた。	3つの柱の一つである「持続可能なライフスタイル」を考える教育実践を展開した。（脚注 5）
	③ 調査研究活動でユネスコスクールに関連した調査研究を行うことができた。	ESD の目的の一つである「持続可能な地域の創り手」育成に関連した研究活動を学部内教員と協働して研究し、その成果報告書である『これからの地方創生・関係人口』を刊行することができた。（脚注 6）
	④ その他	児童教育学部の中でユネスコスクール活動への理解が進むよう教員研修を実施した（岩本）。関東ブロック大会で発表を予定しているユネスコスクール 7 校すべてを「かながわユネスコスクー

		ルネットワーク」のメンバーと一緒に訪問した際に、児童教育学部の教員と国際学部の教員で手分けして協力した。そのことによって支援大学となっている教養学部だけでなく、他の学部でのユネスコスクール活動への理解が進むように努めた。
6. ASPUnivNet のネットワーク機能の活用	① 加盟大学間で情報共有ができた。	関東ブロック大会の運営を通して、特に玉川大学・創価大学・成蹊大学を中心に関東地区の現状について、情報共有ができた。
	② 加盟大学間で連携した取組ができた。	関東ブロック大会の運営を通して、特に玉川大学・創価大学・成蹊大学を中心に企画・運営を連携して行うことができた。
	③ その他	「令和5年度ユネスコスクール加盟校定期レビューの実施におけるレビューアドバイザー」をチームメンバーが担当した。

自由記述

<注>

- 1) <https://researchmap.jp/read0094498/presentations/44222261>
- 2) <https://www.u-tokai.ac.jp/news-challenge/442096/>
- 3) <https://www.u-tokai.ac.jp/ud-global-studies/news/1552/>
- 4) <https://unesco-sdgs.mext.go.jp/archives/3689>
- 5) <https://www.u-tokai.ac.jp/ud-humanities-and-culture/news/5486/>
- 6) <https://www.ningendo.net/books/1230/>